路政小感（四）

淺香生

關門國道隧道豫算の成立

全日本。否世界の眼の焦點である、關門國道隧道計畫は昭和十二、十三年度に跨り、五十萬圓の調査費を以て試掘坑導に着手し、其の基本的調査を行つたのである。此のことは既に屢々本誌や、學界其の他一般に紹介せられた所である。そして其の調査は極めて順調の經過を辿り、本格的工事に對する見透しと自信とを得たので、政府に於ては昭和十四年度より千七百萬圓を投じて、本工事の着手經營を企圖した。其のことの成否は單に主管官廳たる內務省の重責のみならず、我が國科學陣營の總試錬場として、又國防强化の第一線として幾多の意味を持つものであることに付ては今更喋々する迄もない。

斯樣にあらゆる角度からの待望と云ふよりも、寧ろ緊急必須の大事業も、這般の十四年度豫算の編成に當つて端なくも苦境に陷り一時は、その成否すらも危惧せられんとする形勢を呈した。何しろ一方では未曾有の擧國總力戰を控へ、國內的には重なる水害の對策として、治山、治水に奔命せざるべからざる狀勢の下に於ては、全く壁にブツ突けたときの樣で、豫算折衝の時機としては全く孤立無援の立場であつた。

一體土木の豫算は、河川にしても港灣にしても夫れが其の所在地方に直接關係あるものである丈けに、其の支援も亦一入の熱意があるものである。然るに道路となると、眞

當は河川よりも港灣よりも名譽よりも金よりも、無くてはならぬものであるが、夫れ丈けに普遍的であり從つて特殊的後援がない。況んや本隧道の豫算獲得運動に付ても、形式的には何やかやと內務省や大藏省へ對し、壯言な陳情もあつた樣であり騷いでは居たものゝ、夫れには連絡もなく統制もなく思ひ〳〵の主張であり、行動で又其の內實は、事業が國家的なものである丈けに、地元としては何れ中央でやつて呉れるであらうと云ふ下心と、一面巨額になるであらう地元負擔金の關係で或は痛し痒しの錯綜でか、眞に血を絞る樣な態勢でなかつたことは爭へない。此の遲緩した西瓜の日ませの樣な地元の空氣を指導し、財務當局の强硬なる反對を排除して、國策としての線に沿はしむるには餘程英潔の現出か、然らずんば神慮に因るにあらずんば微動だもする餘地がなかつたかに親はれた。

然るに一絲亂れざる內務當局の鐵の如き堅い連繫は、決死路政奉公を旗印として、斯の如く不利にして不滿なる立場に於ても敢然として强力に所信に邁進したのである。

斯くて十一月二十八日午前一時四十五分。劃期的なこの大事業に對する豫算も內務當局の最後の頑張りと、大藏當局の明鑑に因つて正しく誕生し、十二月二日の豫算閣議で正式に決定した。是れは獨り路政當局者の努力の賜物と云ふよりも、又路政上に於ける革新事と云ふよりも、寧ろ隆昌日本の現姿を表顯するものとして當然の歸結であるが、今更顧みて欣快に堪えない次第である。

惟へば本年八月二十七日本豫算を大藏省に要求してから、十一月十八日第一回の査定內示での全額削除から、二十八日承認せらるゝに至る迄往つては戻り、突き出しては、突き返されること前後五回、鞏固なる復活要求に依つて、辛ふじて世に出て來た譯けである。押しも押したりである。

顧みれば昭和四年の頃から、鐵道々路併用隧道や、架橋案等に依る關門直接連絡の議が、內務當局の一角に狼煙を擧げてから正に十年。漸く此の歷史に胎る偉業も愈々其の緒に就いた次第である。

計畫の內容に付ては本誌第二十卷第八號「關門國道隧道

專門協議會」の欄にて紹介の通りである。

國道國營主義の確立

昭和六年度に於て、從來の道路改良計畫が專ら補助政策を採り來りたるを改め、新に國道工事直轄施行の制度を實行し、道路改良計畫に一新紀元を劃したのであるが、爾來此の方針を堅持して今日に及んで居るのであつて、路政進展の爲慶賀に堪えぬ所である。

今本制度開始以來の經過を振返つて見やう。

	事業費	箇所數	延長	
昭和六年度	一六、六八八千圓	六八	五六里七	失業救濟
七年度	一四、八〇八	六四	五五里九	産業振興
同	一、〇〇〇	七	四里六	農村振興
八年度	一五、三七三	五四	四三里一	時局匡救
九年度	六、六三〇	四六	二二里	同
同	一、〇二〇	一三	九里九	農村其他應急
十年度	二、四六〇	一九	一五里四	同
同	四、五四九	三〇	二里六	道路改良
十一年度	四、三八七(單年度)三二		一五里	同
同	三、七〇〇(繼續費)一四			同
十二年度	三、八二四(單年度)二八		一七里四	同
同	四、〇九五(繼續費)一四			同

斯樣にして、本制度の基源は失業救濟事業に創り、次いでは、各々當時の時局に順應したる政策に於て執行せられたのであるが、昭和十年度よりは、本來の道路政策に立ち戻つて經營せらるゝことゝなり、併も十一年度よりは、從來の單年度豫算の外繼續事業も併せて織込まれることゝなつた次第であつて、茲に國道國營主義が愈々基礎付けられた次第である。

昭和十三年度に於ては、單年度事業として、二十三箇所二百二十三萬二千圓、繼續費に於て、三路線を新規に加へて十七箇所、三百七萬七千圓を施行して居るのである。

昭和十四年度豫算に付ては、這般の豫算閣議の內容に依れば、單年度三十三箇所、繼續費に於ては一路線の竣功を見るものもあるが、新に關門國道隧道工事を初め五路線が

加へられることゝなつた模様であつて、結局二十一路線を執行するものである。

誠に十四年度以降に於て繼續執行する箇所を示すと左の如きものである。

路線名	府縣名	改良區間	起工年度
三六	東京	自東京市品川區	
	神奈川	至横濱市神奈川區	昭和11
一	神奈川	自横濱市保土ケ谷區	
		至中郡二宮町	11
一一	新潟	自西頸城郡歌外波村	
		至同郡市振村	11
一一	富山	自射水郡大島村	
		至高岡市	11
一五	奈良	自添上郡明治村	
		至高市郡八木町	11
三二	廣島	自安藝郡坂村	
		至呉市	11
一	靜岡	自濱松市	
		至濱名郡新居町	12
一	愛知	自濱名郡新居町	
		至豐橋市	12
一	三重	自三重郡羽津村	
		至津市	12
二	兵庫	自飾磨郡花田村	
		至揖保郡揖保村	12
一二	滋賀	自伊香郡木之本町	
	福井	至敦賀市	12
一五	京都	自久世郡横島村	
		至相樂郡木津町	12
二五	佐賀	自佐賀市	
		至杵島郡武雄町	12
一二	石川	自江沼郡大聖寺町	
		至金澤市	13
一六	大阪	自泉南郡佐野町	
	和山	至和歌山市	13
二五	長崎	自東彼杵郡彼杵村	
		至北高來郡本野村	13
一	神奈川	自足柄下郡溫泉村	
	靜岡	至沼津市	14
二	山口	自吉敷郡嘉川村	
		至下關市	14
二	福岡	自山口市	
		至門司市	14
三	大分	自速見郡中山香町	
		至別府市	14
二三	香川	自高松市	
		至丸亀市	14

斯くて遂年繼續工事箇所の漸增することは、將來道路改良政策が、全面的に繼續施行を主眼とすることの機運を醸

成するものであり、國道國營主義徹底への道程であつて、輝やく希望に充滿するものである。

土木出張所長會議

恒例の歳末に於ける土木出張所長會議は、十二月二日、三日に亘り內務省會議室に於て開催せられた。

當日は、上海恒產會社の理事として赴任せられる、金古名古屋所長を除く外全所長が出席した。

數日前迄は、非常時局下に於ける來年度豫算の編成で、大藏省との間に數日間、火の出る樣な折衝であつたが、もはやこれも一段落となり、內閣では當日の閣議に此の豫算が正式に附議せられて居ると云ふ鹽梅で、誠に和やかな、闘いの跡のひと時と云ふ風景であつた。

第一日は午前十時から開會。安藤土木局長から大要左の如き挨拶があつた。

土木事業が產業、經濟の上に重要なる關係を有しますることは、今更重ねて申上げるまでも御座いませぬが、今日の非常時局下に於きましても、その重要性は變らないのであります。今回昭和十四年度豫算が編成せらるゝに當りまして、時局下に拘らず利根川增補工事五千百萬圓を始め、淀川增補工事千七百萬圓、鶴見川改修工事七百萬圓、六甲山砂防工事一千萬圓、府縣砂防補助四千百萬圓、關門隧道一千七百萬圓、苅田港七百萬圓、新潟港三百萬圓等の重要なる土木工事豫算が承認せらるゝに至りましたことは吾が土木行政上洵に御同慶に堪へないところで御座います。議會の協贊を經まして、各位がこの豫算を執行せられますまでには、今後尙相當の日子を要するところで御座いますが、今日より豫めその心組をもつて、諸般のことに當られますることは必要なことゝ存ずる次第で御座います。日支の關係は、廣東及武漢三鎭の攻略に依りまして、所謂長期建設の段階に入つたので御座いまして、大陸に於ける經濟建設のために、今後一層人と物との需用が多くなつて來るものと認められます。殊に吾が土木の部門に於きましては、あらゆる經濟建設

の基本であります關係から、眞先にその影響を受けまして部内に於ける有爲の人材を、大陸に送らねばならなくなつたので御座います。從つて、各位が今後事業を施行せられまする上に、影響があることゝ信じますが、大陸に於ける經濟開發を圖るといふことは、吾が國の使命でありますると同時に、一面に於きましては、吾が土木技術の大陸發展の好機でもあるので御座いますから、この大目的遂行のために御協力あらんことを希望致します。

本年は數次の颱風の來襲を受けまして、殆ど全國に亙る大災害を蒙つたので御座います。從ひまして、各位の擔當せられまする事業方面に於きましても、いろいろ苦心を致されましたことゝ存じます。また一部のものに付ては、豫備金の支出を致されたので御座いますが、その執行に當りましては、各位は事業の性質に鑑み、充分努力せられてゐることゝ存じますが、更に一段の工夫を致されまして、速かに事業を完成せられんことを希望致します。

次で澤河川課長から、利根、淀、鶴見川の計畫の內容と中小河川十河川、初年度十四萬圓、府縣砂防費補助の追加三百九十七萬圓が新規に承認せられたる旨及既定費に於て災害補助費三割五分、先般の災害の實狀に鑑み繰延ぶることを得ざる直轄河川十九河川を除き三割七分、同中小河川に於て十五河川を除き三割七分の繰延べを蒙つた旨の說明があつた。

次で灘尾道路課長は、府縣道の助成費及單年度國道改良費は、本年度の實行豫算と同額のものを得た。また新規の國道繼續事業として、總額七百二十萬圓で、四路線の改良が認められ、雪害防除對策として府縣道の補助費二十萬圓が新に加へられ、待望の關門國道隧道開鑿工事も、十ケ年で千七百萬圓の繼續費が承認せられた。其他軍事國道の改良や、大島振興及沖繩振興事業は略々本年度實行豫算額程度である。たゞ國道改良事業の既定繼續費は、政府の方針に依る他の一般經費と同樣、五割の繰延べに遭遇したことは誠に遺憾であるが、事變下眞に已むことを得ざるの措置であることに鑑みて了承せられたいとの趣旨の說明があつた。

生悅住港灣課長は、新潟、苅田港の計畫內容と新に地方港灣とし四港百七十二萬圓が計上せられ、また既定繼續費中、下關、門司、博多、洞海灣及十四年度に完成する港灣を除き、既定年割額の五割を繰延べられた旨の說明を爲した。

これで午前中の會議を閉ぢ、夫れより一同打ち連れて金古氏及北支建設總署に赴任する、都市計畫兵庫地方委員會高林技師外十名の送別午餐會に臨んだ。

午後三時から官邸に於ける末次內相のお茶の會に列席した。

三日は午前十時から、主として人事の問題に付協議を遂げ、午後は各所の所管事務に付いて夫々の關係者と打合を爲して散會した。

交通事業調整委員會特別委員會

十一月十六日の第二回交通事業調整委員會に於て、同委員會に對し「東京市及其ノ附近ニ於ケル陸上交通事業ノ調整ニ關スル具體的方策如何」を諮問されたので、之を十九名の特別委員に附託して調査審議を進むることゝなしたことに付ては、前號に紹介した所である。

此の特別委員會は、十一月三十日午後二時より、其の第一回の會議を鐵道省第一會議室に開會した。

先づ、研究の方策を樹立する爲の參考資料として、「倫敦の交通調整の事情」を鐵道省陸運監理官古谷善亮君より聽取し、次で「伯林の交通と調整の實狀」に付て、鐵道省事務官吉井政信君より說明を求めた。

又十二月九日には、其の第二回目を、同じく鐵道省第一會議室に於て開會し、都市計畫東京地方委員會事務官高橋登一君より、「大東京の人口と都市計畫」に付て說明を聽き、引續き、鐵道省陸運監理官菱谷惣太郎君より、本年五月十七日に施行した東京市及其の附近に於ける「交通量調査に付て」の報告を聽取した。

中川正左委員は、東京市及其の附近の交通を調整するには、會社の合併又は設立とか、事業の讓渡の如き恒久策と、運賃又は料金の協定とか連絡運輸の如き應急策とがあるも

のと考へられる。故に一方に於て恒久策を研究しつゝ他面に於て、此の輕易なる應急策をも考究し且つ速やかに實施せしむることは市民の緊急な要望である。仍て幹事に於て之等應急策を考究して、本委員會に提出して貰ひたいとの動議があつた。之に對し鈴木幹事より適切な御意見である、内務省とも打合せ充分研究して見たいとの答辯があつた。

第三回は追て日時を決定することゝして散會した。

第三次北支派遣官

長期建設戰に入つた支那に對し、嚮に我等は、第一次に柳澤内務技師の一行六名を蒙疆政府に送り、次で三浦下關土木出張所長の一行四十六名を、北京臨時政府へ送つたのであるが、今回更らに左記十一名及此の外、科員三名、技士三十三名、事務員一名と都合四十八名を第三次として北京政府へ送ることゝなつた。各位は何れも北支建設總署の官吏として、各專門的に北支開發の基礎的土木事業の調査研究に携はられるのであつて、日本土木の眞髓を十二分に發揮せらるゝ譯である。

因に一行は十二月二十五日頃打連れ内地發夫々赴任せらるゝ趣である。

北支建設總署

公路局	工務科	技正	桐谷一男	仙臺出張所	内務技師	七等十級	昭六	東大
水利局	河川科	技正	矢野勝正	土木局	内務技師	七等十級	昭六	京大
都市局	技術科	技正	五十嵐醇三	東京出張所	内務技師 土木技師兼	七等十級	昭七	東大
	水道科	科長	石黑重國	千葉縣	道路技師 都市計畫地方委員會技師	六待十一級	昭四	東大
北京公路工程局	都市科	技正	森重一夫	福島縣	道路技師兼 土木技師	七等十一級	昭九	東大
濟南公路工程局	工務科	科長	岡本但夫	岐阜縣		六待九級	昭四	東大

同	都市科	科長	高林泰一郎	兵庫縣	都市計畫地方委員會技師	五等九級	昭三	東大
太原公路工程局	工務科	科長	皆川久	北海道廳	〃	七等十級	昭三	北大
同	工務科	技正	山崎博	新潟出張所	內務技師	七等十級	昭七	東大
濟南水利工程局	工務科	技正	野田道也	北海道廳	土木技師	七待十一級	昭六	九大
同	濟南施工所	技正	田中幸吉	福島縣	道路技師兼土木技師	七待十級	大正一四	仙高工

鋪裝政策の檢討

道路を鋪裝せざるべからざる緊急性のあることに付ては、既に屢々論議せられ、各種の研究書や、路政界に於ても其の發表を見、又帝國議會に於ても、現下道路交通の見地からもまた道路の維持上からも、其の必要性が論議せられ、殊にガソリン稅の創設に關連して頗る强調せられた所である。從つて之が國策化することは、殆んど政府の道義であるかにさへ世間では認められて居つた所である。

然るに窺知する所に依れば、十四年度豫算の編成に於ても之が實現を見るに至らなかつたと云ふ事であるが、誠に遺憾の極致であり、思はざるの甚敷ものである。

道路鋪裝が、其の效果的見地より且つ企業的價値の上からするならば、之を端的に云へば、一日の自動車交通量が七百臺に達するに於ては、次年度に於て直ちに其の元資を償却し得るに存する。これは專門家の理論であり實際家の實驗である。凡そ現在の經濟企業にして、此の如く僅かに一ケ年にして斯樣な收益を齎らす事業は、如何なる時局產業と雖恐らく追隨することを得ざる有利なる企業と云ふべきである。

來年度豫算に於て、內務省が樹立せんとする道路鋪裝計畫の概要は、國道百二十二粁、府縣道八百八十八粁であつて、前者に付ては事業費百五十萬圓、後者に付ては四百五十萬圓計六百萬圓の事業を遂行せんとする趣旨であつた。

何れも繼續費ではないが、大體十ケ年間の計畫の下に其の一部を施行せんとするものである。之れに對しては、現在の鋪裝の狀態が國道に於て十四パーセント、府縣道に於て二パーセントの實狀に稽へ、吾人は其の規模の餘りに狹小なるに吃驚した位のものであつた。

此の計畫と主張に對し、何故に政策化するに至らなかつたか。大藏省の査定は、鋪裝事業固より異議なしである。併しながら一體我國にはガソリンを節約すべき筈のガソリンが無いではないか。元々全部のガソリンを節約しても其の效果は極めて僅少である。强いて內務省に於てそんな政策を採りたければ、普通の道路改良費の內で然るべく運用すればよい。別に政策として看板を揭ぐる必要がないと云ふ樣な意味合ひらしく、第三次第四次の復活要求に付ても頑として同意しなかつたらしい。此の大藏省自身の說にも前後矛盾を見るのであるが、また認識の相違から如何る窮策でもある。

何れにしても此の合理的路政々策に對する此の御返事には、內務省も聊か度膽を拔かれた形である。

然るに一方國策を檢討し、樹立すべき立場からの企畫院方面にては、道路を鋪裝することは、勢ひ自動車保有量と其の增產計畫とも合致するものであり、時局下必須の事業であるとして絕對支持の態度であつた。商工省燃料局では現下長期戰體形の下に於て、ガソリンの一滴は、皇軍の血の一滴であるとの建前から、今や其の規正に大童の折柄、代用燃料の研究と相俟つて其の實現は双手を擧げての期待であつた。斯樣に自他共に要望する此の政策に對する大藏當局の態度は、右の如きものであるが、此の態度を採らざるべからざりしものとして吾人が想像を許すべきものは、何しろ土木局の要求豫算中には、計數的に見れば此の鋪裝計畫の外、利根川、淀川の大計畫、砂防事業、新潟、苅田港の修築、關門國道の隧道計畫等相當膨大な豫算の要求と掛け合つたことも、勢ひ比較的背景的支援の薄かつた鋪裝計畫に大斧を加へることがヤリ易かつたと見る程度であらう。併しながら苟も、國策的見地に於て判斷すべき重大案件の强

ひ方としては誠に呆氣ない次第であつて、歸するところは何と云ふても國民全般の認識の不足に基因するのである。故に鋪裝計畫の檢討は卽ち國民の鋪裝に對する認識の是正再教育に歸するものと斷ずべきである。

青森縣の道路愛護

青森縣廳土木課

一、緒言

道路は公衆の共有物であり又種々雜多の用向を有する人々に依つて使用されて居る。近時產業文化の進展發達に伴ひ車馬、自動車の往來は愈々頻繁となり道路の利用と其の改善を痛感せらるゝに至つた。本縣も此處數年間は凶作救濟、冷害救濟、冷水害救濟或は東北振興土木事業等々政府の補助を仰ぎ重用なる路線に對しては改修改良を爲すことを得て居るが何れも逼迫せる縣財政と限りある豫算とでは到底萬全を期することは出來ない本縣に於ても夙に現代交通の使命を全うせしむるには道路を利用する關係各自の勞力奉仕や團體的作業、活動及公德心に訴ふるの他なしとし昭和五年道路愛護奬勵規程を制定し、道路愛護運動を續けて來たが、天災地變又は雪害に打ちのめされ疲弊困憊其の極に達したる際とて、結果に於いて見る可きものがなかつた。

今年は政府に於いて戰時體制强化の基調として國民精神總動員强調週間を實施せらるゝや本縣に於いても銃後國民の護の完璧を期すると共に政府の主旨に副ふべくこれに適應して道路愛護運動を起し以つて國民精神の高揚强化に努めんことを期し、第一回を六月二十九日、第二回を九月二